

学習現場で先頭に立つ研究を

坂 口 順 治
(平安女学院大学)

1. 自分史的省察

いささか自己宣伝になるが、自分の歩んできた道を述べてみたい。

実験室の心理学を専攻した筆者は、1950年代の終わりにアメリカに留学、学際的研究の先鞭をつけた「行動科学」の洗礼を受けた。

集団力動学 (Group Dynamics) の実地調査研究 (Action Research), リピット (Lippitt, R.) らのリーダーシップの実践的研究, 人種差別撤廃運動の社会心理学的研究, オルポート (Allport, G.W.) の人格心理学の理論形成過程などを直接に見聞した。これらはジェームス (James, W.) の流れを汲むプラグマティズムや、実存哲学の人間観に裏打ちされた臨床科学とも呼べる実践と研究とを統合化する努力であると感じとった。

集団力動学の創始者レヴィン (Lewin, K.) は、「There is nothing so practical as a good theory」と述べているように (注1), 実際に役立ってこそ理論として成り立つと言えるであろう。今を生きる人間のより良い生活を求める学際的研究は、実践現場の活動に原点があることを知った。

帰国後、実験室の研究から飛び出して、アクション・リサーチの帰納的研究に転向、人間関係とグループ活動に集中した (注2)。日常生活では社会教育や社会福祉の分野でボランティア活動と、「働く若者たち」の実態調査や青少年の教育福祉問題に取り組んだ。また、国立社会教育研修所が創立された頃でもあり、社会教育の指導者育成にも関わる機会が与えられた。

英国の社会教育家キーブル (Keeble, R.W.,) (注3)は、「自らも成長していこうという意志のある者こそが他人の成長を助けることができる」と語っているように、教育は相互の関係形成過程の学習によってなされることを会得した。こうした立場から、企業内教育では当時の激しい労使対決の時代を克服する学習として、労働からの人間性回復を意図したTグループ訓練の提唱 (注4)、実践的リーダーシップの研究 (注5)などを発表した。

こうしたときにわが学会は発足した。生涯を通して学習し、実践重視の研究活動が魅力的に見えたので積極的に参加した。生涯学習はプラトンではないが「いかに生きべきか」を問いかけ問いかけられながら、人間関係を創造する生き甲斐の体験学習であることに注目したのである。

2. 70年代の課題

1970年代は大きな社会的変革の時代であった。自然科学や合理的科学主義の行き詰まりを打破すべく、ニュー・サイエンス・エイジと呼ばれたパラダイムの変革が提唱され、教育も臨教審や中教審が改革案を提出した。いわゆる教育の第三の改革時代が到来した。

従来の教育は教える側に主導性があり、内容と方法と評価の研究が主であった。教育の対象となる学習者は一括された抽象性で論じられ、教える側の論理が優先したのは社会教育の分野でも同じであった。被教育者である個々人を市民という抽象でとらえ、教える側の論理を中心にした視点は、理論優先実践軽蔑の権威主義であった。こうした傾向を打破すべく、学習者中心の教育活動が盛んになったが、これとても学習者の人権を尊重するという一方の立場を強調するあまり、逆権威主義の様相を呈していたといえよう。

近世ヨーロッパの大学は神学、法学、医学の三学部制で、それぞれ神学は教会、法学は法廷、医学は病院というように実践の場をもち、研究と実践との相互関係を保っていたが、日本のそれは理論研究優位、実践蔑視の思想になってしまった。それはやはり明治以来の権威主義の伝統だろうか。

実践は即時的で感覚的で個別的で身体的で部分的になってしまう。一方、理論は客観性と抽象性をもち、知的で予見性と統合的優位性をもつ。この両

者のダイナミックな関係、応答性を欠いているため、人間の「いかに生きべきか」という基本的課題が消され、現代の教育的荒廃が生じている要因になっているともいえよう。それはまた研究者たちが時代の変化に対応できない古い枠組みに固執しているからではないだろうか。実態よりも卓上理論を優先する研究者や、それを尊いと思う実践者がいるからであろうか。

過去の学会の動向をみても、研究と実践の相互関係を標榜しながらも、その関係は必ずしも期待通りにはいかなかったと自戒している。しかし、学会は従来の慣習を打破した新鮮さをもっていたし、時代の先頭に立って新しい方向を指し示す使命を継承していることを誇りにしたい。

3. これからの課題

現代は超情報社会を形成しつつある。情報は社会や文化の格差を平準化していくはたらきがあり、また情報は知識を記号に変換する特徴がある。それらによって、人間は情報を選択し統合するような主体性をより以上に求められることになる。さらに一から多へというマスメディアやマス・コミュニケーションの時代ではなくって、一から一へと世界を魚網のように個別のネット・ワークで結び、個人の活動が優先する時代である。個性性と具体性を極度に発揮するシステム社会である。しかし、同時に人と人とが五感で触れ合う直接的コミュニケーションが不足する時代になっている。間接的コミュニケーションが増大するが、直接的な人との触れ合いによって共感性と自己規制が育まれる学習機会が不足する。こうした時代に突入しつつある現在、生涯学習の研究と実践の相互関係は質的に変化していかざるを得ない。

これからの時代は実践が同時に研究である。インターネットが個別的で間接的なつながりであるが故に、学習の現場は五感の触れ合う直接的交流の場であり、個々の具体的な行動をとらえることによってつくりだす研究が意味をもつ。例えば、「国境なき医師団」のNGOの活動をみても理解できる。世界のネットワークを完成したが故に、相互連絡によって医療から生活改善の学習に結びつくプログラムを展開している。また、最近のアメリカの研究者たちの運動をみても理解できる。社会学者エチオニー(Etzioni,A.)が

リーダーになって具体的な活動をしているのは好例である。アメリカ社会の道德意識の低下，犯罪の増加，権利要求の行き過ぎ，社会的責任の回避などの具体的な問題に取り組んでいる。これらは教育の研究と学習の現場とのダイナミックな関係を通して社会改善を意図した活動である。

ひるがえって，我が国の事情をみると，いままでもリーダーシップを発揮してきた研究者たちが，以前と同じように第三者的評論家になって現代の教育を論評している。いまの教育問題を生じさせた要因が自分たちであることを反省することもなく，現代の疲弊している教育を論じているほど滑稽さと無責任さはない。

そこで我が学会に期待する。研究者が実践の世界に入ることからスタートしよう。卓上議論であったり，仮説的であったり，はたまた現実を観察するという第三者的であることから脱皮して，現実の場に生きることによって実態を肌で知る。その体験が研究になる。細かな各論はその後のことで，まず態度の変革を迫りたい。そのためにはインターン・シップのような制度を学会が設定して，援助できるシステムを構築する提案をしたい。

また，カナダの一部の国立大学で行っているような，現場と大学とのが往復できるワーカー教官制度も必要である。さらに，学校，地域，家庭の三者融合という発想から，一步出て大胆な現場活動の研究を行って，研究成果を学会として出すべきである。その意味からも次の十年に向かってプロジェクト・チームを作成して，パイロット研究活動を果敢にやるべきであり，そこに大いなる期待をかけたい。

注

- 1) Marrow, A.J., 1969 The Practical Theorist, 「The Life and Work of Kurt Lewin」, Basic Book.(望月, 宇津木訳『クルト・レヴィン』誠信書房, 1972)
- 2) 拙稿 1970 「人間回復をめざすTグループ訓練」『労働の科学』25, 3, 東京: 労働科学研究所
- 3) Keeble, R.J.A., 1965 A Life full of Meaning, London: pegamon Press. (永井訳, 「ユース・ワーカー」, 東京: 日本 YMCA 同盟出版)
- 4) 拙稿 1972 「センシティビティ・トレーニングの問題」『生涯教育の研究』日本社会教育学会編, pp.96-105. 東京: 東洋館出版社,
- 5) 拙稿 1970 「リーダーシップとTグループ」日本社会心理学会編, 『年報社会心理学』11. pp.127-141. 東京: 勁草書房